

佳作

わたしはしゃべるのが下手

宮城県気仙沼市立大谷中学校

1年 高橋 祈梨

ふと本屋である本のタイトルを見たとき、一瞬「わたしはしゃべるのが下手」と、勝手に読み間違えて、血の気が引いた。そのまま本を開いてみると、登場人物の二人が、「食べること」に対して感じている不安や悩みが、自分の「話すこと」に対する気持ちと不思議なほど重なって、あっという間に物語にひきこまれた。

私は、学校でうまく話すことができない。頭でイメージした声量にどうしても届かず、緊張して、何を話しているのか自分でも分からなくなってしまう。

「私の言いたかったことは、これじゃなかった。」

と、夜になって頭を抱える日も多い。

何かの発表の時間は、特に気が重くなる。

「すみません、もう一度お願いします。」

と言われるたび、申し訳なささと情けなさで、消えてしまいたくなる。

小学校の学芸会は、思い出したくなくても何度も頭の中によみがえってくる。震災を題材にした劇で、下級生や地域の人たちに伝えたい思いが、セリフの中にたくさん込められていた。私は何度も練習を重ねて、大きな声を出せるようになったと少しだけ自信を持っていた。

本番が近づいた日、先生が練習の様子を動画に撮影して見せてくれた。みんな真剣に、気持ちの伝わる演技をしていた。でも動画は、私の声を全く拾っていなかった。何も伝えず、ただ口をパクパクしながら動いているだけに見える私は、いない方がいいのではないかなと思えるほど格好悪く、できていると勘違いしていた自分がとても恥ずかしかった。

その日から、

「私が話しても、どうせ聞こえない。どうせ伝えられない。」

という思いがつきまとして、話すことがますます苦手になった。

みんなが当たり前のようにできていることを、私はうまくできない。話すことが苦手なその部分を、自分から切り取って捨ててしまえたら、どんなに楽になるだろうと、何度も思った。

この本を読み終えたとき、その気持ちが少しだけ薄くなっていることに気が付いた。

「みんなにとっての当たり前ができない苦しさ」は、私だけではなく、きっと

誰もがどこかに持っていて、今の私に足りないのは「そんな自分も受け入れる」という前向きな気持ちなのではないかと思った。

登場人物の生き方から、話すことが苦手な私も、
「無理にみんなと同じにこだわる必要はないのかもしれない。私なりの方法で、自分の思いや考えを伝える道を探してもいいのかもしれない。」
と、少し前向きな気持ちが芽生えた。

私は歌うことが好きだ。歌なら、言葉をメロディーにのせて表現できる。なぜか不思議と、話すときよりもずっと自然に声が出る気がする。高い声がうまく音程にはまると、とても気持ちがいいし、自分の中にある思いを音で届けられるような気がして、うれしくなったりもする。

もう一つ、絵を描くことも得意だ。何かを模写することよりも、自分で構図から考えていくことの方が、ずっと楽しく感じる。自分の中に浮かんできたイメージを紙の上に形にしていく時間が、とても好きだ。

中学校に入ってから、学年だよりのロゴのデザインを褒められたときにはすごくうれしかったし、美術の授業がある日は、朝からわくわくした気持ちで登校している。

歌っているときの自分、絵を描いているときの自分は、何にも緊張していない、ありのままの自分でいられて、自分のことが好きだと思える。うまく話せないときには孤独を感じてしまうけれど、歌や絵で自分を表現できたとき、褒めてもらえたときには、人との温かい繋がりを感じることができる。

自分の気持ちや、自分にしか見えていない世界は、言葉だけでなく、メロディーや色、形で表すことができるのかもしれない。そう考えると心が軽くなる。

私はこれから、話すことへの苦手意識が少しずつでもなくなるように努力したいし、いつか克服できるように、自分を少しずつでも変えていきたいと思っている。でもまずは、話すのが苦手な今の自分を、ありのままに受け入れていきたい。そんな自分も自分なのだと、ちゃんと認めてあげたい。

そうすることで、今よりも少し毎日を楽しく過ごせるのではないかと思う。そしていつか、私と同じ悩みを持つ人に、

「そのままで大丈夫だよ。」

と、大きな声で話しかけられる自分になりたい。